

厚生労働大臣賞 最優秀賞

第7回 健康寿命をのばそう！アワード〈母子保健分野〉自治体部門 取組概要

自治体名	静岡県
取組タイトル	小さく生まれた赤ちゃん和妈妈・パパのための手帳による育児支援 しずおかリトルベビーハンドブック
WEB サイト URL	http://www.pref.shizuoka.jp/kousei/ko-140/shizuoka_lbh.html
健やか親子 21 (第2次)取組課題	☒ 基盤課題 A「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」 ☐ 基盤課題 B「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」 ☒ 基盤課題 C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」 ☒ 重点課題①「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」 ☐ 重点課題②「妊娠期からの児童虐待防止対策」

しずおかリトルベビーハンドブックとは？

しずおかリトルベビーハンドブックは、小さく生まれた赤ちゃん和妈妈・パパのために、全国で初めて当事者である母親たちと一緒に作成した低出生体重児用の手帳です。早産等による低出生体重児の場合、身長や体重などの成長や運動機能の発達が正常産の児と比べて遅れることが多く、月齢ごとに標準的な成長・発達を確認する通常の母子健康手帳では記録できない項目もあるなど、母親たちの心理的な負担が強くなっていました。そこで、静岡県では、発達の遅れを考慮した低出生体重児用の手帳「しずおかリトルベビーハンドブック」を作成し、平成 30 年 4 月から配布を開始しました。

**しずおかリトルベビーハンドブックの使い方**

しずおかリトルベビーハンドブックは、通常の母子健康手帳と一緒に保管・使用します。健診や予防接種など妊娠・出産・子育てに関する重要な情報は、従来どおり母子健康手帳に記録し、母子健康手帳での記載が難しい部分をこの手帳で補います。

しずおかリトルベビーハンドブックの特徴

- 3 つの当事者団体と総合周産期母子医療センターの医師・看護師等専門職、行政機関などが一緒になって母親目線で作成した全国で初めての手帳
- 両親が児の細やかな成長を喜ぶことができるよう、月齢単位ではなく、成長・発達の遅れや個人差を考慮した記録項目を工夫
- 保護者の心理的不安に寄り添うために、先輩ママ・パパのメッセージを全ページに挿入、元リトルベビーたちの作品や家族会の紹介ページを作成
- 医療機関が入院中の様子などを記載するための記録用シールを作成
- 極低出生体重児（出生体重 1,500g 未満の児）用の発育曲線を掲載

【発達の記録のページの見方と記録方法の説明】

確認したい項目です

確認したい項目（赤ちゃんの様子）は、発達の段階から見たときにどういう意味があるかを説明しています。

確かめた「みーつけた！」日を記入しましょう。
「月 日」「生後 日目」
どちらでもよいです

しかめ顔などの表情をする
「表情が豊かなしるしです。次は必ず笑いますよ」

3月9日

発達の記録のページの例



NICUで手帳を配布しています



家族会でママたちから手帳の感想を聞きました

初めて赤ちゃんを抱っこした日 ママ 年 月 日
() 年 月 日

初めてチューブやテープが何もない赤ちゃんの顔を見た日 ママ 年 月 日
() 年 月 日

赤ちゃん和家人の「初めて・・・」の記録の例

成果と今後の展開

利用者からは、「小さく生まれたからこそ特別な記録ができる」「同じ経験をしている母親と出会うきっかけになった」など多くの喜びの声をいただいております。県が主体となって作成・発行したことや検討段階から多くの関係機関と一緒に作り上げたことで、全ての周産期母子医療センター・市町での配布の協力が得られ、支援が必要な全ての児と家族の手に渡る体制を整えることができたといえます。さらに、全戸配布の広報誌（県民だより）や全国版の子育て雑誌への記事掲載、ホームページ上での「電子ブック版」の公開、講演会や交流会での説明など、幅広く周知をしており、県内外よりたくさんのお問合せをいただいております。

「しずおかリトルベビーハンドブック」が本県のスタンダードな母子保健サービスとして定着することで、誰ひとり取り残されことなく安心して子育てができる地域づくりに繋がるものと考えています。今後は、市町の乳幼児健診や地域のかかりつけの小児科等でも当たり前のツールとして活用されることを目指して、本手帳の普及と活用支援に取り組んで参ります。

先輩ママのメッセージに
勇気もらった

できるようになって
チェック
できるのが嬉しい

手帳を利用した
ママ・パパたちの声

“だいじょうぶ”と
あと押しして
もらった気持ち

記録がつけれれると
なんとか前を向いて
いけそうと思えた

感動・共感できること
ばっかり！

企業名	ソニー株式会社
取組タイトル	子育てに活用できる電子お薬手帳サービス「harmo（ハルモ）」
WEB サイト URL	http://www.harmo.biz/
健やか親子 21 (第2次)取組課題	☒ 基盤課題 A「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」 ☐ 基盤課題 B「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」 ☒ 基盤課題 C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」 ☐ 重点課題①「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」 ☐ 重点課題②「妊娠期からの児童虐待防止対策」

取組の概要(取組の背景・目的・対象者・成果・今後の展開など)

お薬手帳は、医師や薬剤師にいつも飲んでる薬を自分に変わって説明してくれる大切な冊子です。薬の重複投与を防いだり、副作用など気になる症状があった場合かきこんでいて、医師や薬剤師に伝えるなどの役割も果たします。東日本大震災の際に、お薬手帳を持っていた被災者には迅速に薬の配給が行われ、重要性が見直されました。しかし、紙のお薬手帳には、持参忘れ、紛失、1冊化できないなどの課題があります。さらに、親は子どものお薬手帳を何冊も管理する必要があり、持ち運びが不便という声もありました。ソニーはこれら紙のお薬手帳にまつわる問題を電子化することで解決し、全国10都市での試験サービスを経て、harmoは調剤薬局にとどまらず病院・診療所等の施設で認められました。この結果、2018年8月現在、全国で853軒の調剤薬局と89軒の病院、診療所に導入され、28万人もの方々に利用されるまでになりました。

2015年にはソニーと川崎市薬剤師会、川崎市との協定により川崎市立の4つの病院にサービスが導入されました。特に川崎市立川崎病院の小児科医と連携したことで、周辺の診療所、調剤薬局でのサービス普及が進みました。この取り組みにより、お薬手帳の持参忘れが減り、医師や薬剤師が確実に子どもの薬を確認し処方や投薬に役立てられるようになりました。ある薬局では、harmoの普及により、持参率が20%ほど向上したというデータも得られました。また、同病院では電子カルテへお薬情報の取り込みが簡単にできるようになり待ち時間の短縮にも役立っています。病院を訪れる保護者の皆様から、「カードタイプなので忘れることが無い」「いつでもスマホで子どものお薬が確認できて便利」というお声を頂いており、好評を得ています。この結果、比較的药を利用する機会が多い子どものお薬の情報を家族だけでなく、医師や薬剤師も共有する仕組みができ、地域で子どもの成長を見守る仕組みが確立し、harmoが地域の医療に貢献できました。

・川崎市での導入事例はこちら：<http://www.harmo.biz/medical/case/case-005/>

・実際にお使いの患者様の声はこちら：<http://www.harmo.biz/customer/voice/>

harmo サービスでは、調剤薬局にて患者ひとりに1枚のharmoカード(図1)を発行します。このカードは財布などに入れておけるため持参忘れを防ぐことができます。カードはSuicaなど交通系ICカードと同じものを採用しており、スマホをお持ちで無い方でもご利用になれます。患者はカードを薬局のタブレット端末にタッチするという簡単な操作のみで自らの薬の情報を医師、薬剤師等に伝えることが可能のため、お子さまや高齢者でも簡単に使えます。カードは発行した薬局でいつでも再発行ができるので、カードを紛失してもデータを取り戻すことができます。



図1 harmoカード

harmo サービスはスマホアプリ(図2)の併用もでき、アプリを使うことでご自身、お子さまや家族の調剤履歴を薬の写真付きでスマホ1台で閲覧できます。表示している薬の説明は「くすりのしおり」(くすりの適正使用協議会)を採用しており非常に信頼性の高い情報となっております。

薬の服用をサポートする機能に関しては、調剤ごとのメモ欄に症状の経過や、服用した効果・感想などを自由に記録できるため、後から詳しい状況を振り返ることができます(図3左)。さらに、服用履歴は季節ごとの通院の振り返りにも活用できるため、ご自身、家族の体調管理にも役立ちます(図3右)。

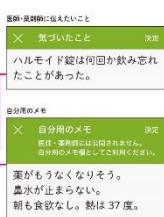


図2 スマホアプリトップ画面 図3 スマホアプリの活用方法(感想/症状のメモ・過去の振り返り)

harmo はお薬の情報をデータセンターで管理しているので情報共有が容易にできます。harmo アプリを両親がインストールすれば、お子さまの調剤履歴を父母など保護者同士が共有して管理したり(図4)、離れて暮らす高齢者の状況を家族が見守ることができます。このように、harmoアプリは、家族が子どもの健康を見守る仕組みを提供しております。この特長を活か、発達障害に悩む親子の服薬を支援する取り組みや(ご紹介 URL：<https://h-navi.jp/column/article/35026751>)、川崎市の一部の区において医療機関から予防接種の情報を送り管理する取り組みなど、子育てに役立つ様々なトピックにもチャレンジしております。

今後も、弊社は harmo を子どもの健康を見守る、医療・健康情報プラットフォームとして発展させて参ります。

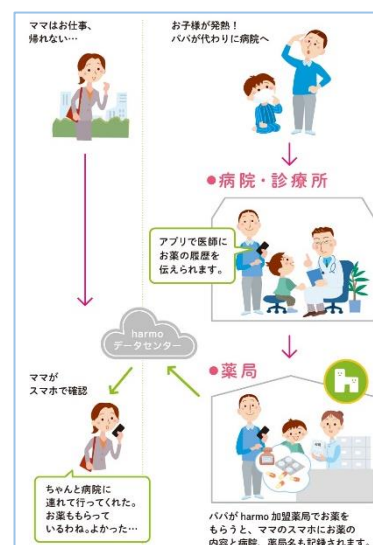


図4 子どもの薬の履歴を両親のスマホで共有

厚生労働大臣賞 団体部門 優秀賞

第7回 健康寿命をのばそう！アワード〈母子保健分野〉団体部門 取組概要

団体名	特定非営利活動法人こまちぷらす
取組タイトル	地域で子育てを歓迎する官民住民連携プロジェクト～ウェルカムベビープロジェクト～
WEB サイト URL	http://welcomebabyjapan.jp/
健やか親子 2 1 (第2次)取組課題	☒ 基盤課題 A「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」 ☐ 基盤課題 B「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」 ☒ 基盤課題 C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」 ☐ 重点課題①「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」 ☐ 重点課題②「妊娠期からの児童虐待防止対策」
取組の概要(取組の背景・目的・対象者・成果・今後の展開など) 概要： まちのみんなの「おめでとう！」の気持ちを、赤ちゃんとそのご家族のみなさんに届けていきたいと活動しているプロジェクト。家族のみならず地域全体で赤ちゃんの誕生を歓迎し、地域全体で子育てを見守る文化の醸成を目的に、2016 年 4 月官民住民連携で立ち上がり、横浜市戸塚区からスタート。NPO 法人こまちぷらすと、ヤマト運輸株式会社神奈川主管支店が事務局をつとめ、行政や地元商店街、企業と連携し、皆が地域の一員としての立場で進めている。このプロジェクトを通して、多くの人が子育てに関心をもち、「私に何ができるのだろう？」と考えるきっかけを作ること、様々な好事例が生まれている。横浜市青少年局後援。 取り組み詳細： ① 子どもの誕生を祝福する気持ちをこめて、地域と企業・団体から、戸塚区・鶴見区在住で、赤ちゃんが生まれ、お申し込みがあったご家庭に無償で『ウェルカムベビーボックス』を届けている。2017 年度は戸塚区で生まれた 470 の家庭にウェルカムベビーボックスを届けた。鶴見区は 2018 年度からスタート。 ② 0 歳児おしゃべり会や 0 歳からの絵本講座を計 15 回開催し、0 歳児親が 65 人参加。子育て当事者が悩みを言語化し仲間づくりをするだけでなく、プレゼントを受け取った人がウェルカムベビーボックスに入っている「背守り」を縫う会「とつか背守り会」に、プレゼントを贈る側として参加するなど子育て層の主体性を引き出し、地域の中で循環を生む仕組みを設けている。(背守り会は毎月 2 回開催) ③ 保育園と協同企画(園長先生の絵本読み聞かせ等)を年 6 回開催するなど既存の子育て支援施設と連携し、共に見守る関係をつくっている。 ④ 地域の産院と協働し、産前産後支援団体の協力を得て、プレママ・プレパパ講座を開催し、産前からの情報提供を行っている。(2017 年度は計 3 回実施しプレママプレパパ等 52 人参加) ⑤ プレゼントの募集及び選考会の実施、子育て層のニーズをひろうワークショップの開催等、地域の方に子育て層の課題を知ってもらい、「自分にできること」を考える仕掛けをつくっている。当事者、支援者、企業、行政が一つの場集まり、子育てのよりよい環境を考え、様々なコラボにより新たなものを生み出す試みにもなっている。2016 年度はウェルカムベビープロジェクトおむつ自動販売機の開発を行った。これは、おむつ、ウェットティッシュと飲み物が一緒に購入できる自動販売機であり、本プロジェクトのワークショップを通じて、お父さんの願いを企業がコラボし、実現したもの。おむつ自動販売機は、横浜市内商業施設に 2 機、都内に 1 機、大阪府の空港に 1 機設置され、横浜市外でもプロジェクト趣旨に賛同し、設置が進んでいる。 今後は、離乳食や防災と掛け合わせた取り組み含め、様々な方とともに他地域へ展開したいと考えている。	



ウェルカムベビーボックスの中身



住民手縫いの背守り及びメッセージについて



第7回 健康寿命をのばそう！アワード〈母子保健分野〉自治体部門 取組概要

自治体名	東郷町（愛知県）
取組タイトル	東郷モデル「支援をつなぐ～発達障がい児の早期発見・早期支援の取り組み～」
WEB サイト URL	
健やか親子 2 1 (第 2 次)取組課題	☐ 基盤課題 A「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」 ☐ 基盤課題 B「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」 ☐ 基盤課題 C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」 ☒ 重点課題①「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」 ☐ 重点課題②「妊娠期からの児童虐待防止対策」

【取組の背景・目的】

発達障がい児・者の生活の辛さが明らかになり、家族や周囲の理解によって、その生き辛さが和らぐことが分かってきています。学齢期においては、二次障がいにより自己肯定感の欠如や不登校が生じています。併せて、発達障害者支援法の改正では、地方公共団体の責務が明らかになり、地域の実情に応じた体制の整備が課題となっており、本町では、平成 23 年度から発達特性のある児童の保護者への支援をするために「東郷モデル」支援体制（図 1）を作り、特性が現れる幼児期から早期に支援を開始し、自己肯定感を育てながら、幼児期及び学童期を過ごせるよう、保健・福祉・教育関係者が連携し、切れ目のない支援を体制化しています。

【東郷モデルの特徴】 ～ライフステージが移っても、支援が継続されるように～

- 1 発達障がい児の発見と支援体制を保健・福祉・教育関係者で構成される東郷町発達障がい早期総合支援連絡協議会にてモデル化し、ライフステージが移っても、支援が継続されるよう、その支援体制に基づき実施してきたこと。
- 2 母子保健担当者が要となり、育てにくさを抱えている保護者の支援に結びつくよう、切れ目ない支援をコーディネートし、関係機関と連携し実施していること。また、幼少期を担当した保健師が十分な調整を重ね、個人情報の取り扱いなどに特に関心のある学校関係者との連携調整を行ったこと。
- 3 愛知県が養成した愛知県発達障害支援指導者、臨床心理士を中心とした発達支援スタッフが、園や学校を巡回し、相談を実施していること。
- 4 育てにくさを感じる保護者への支援を 1 歳（お誕生日相談）から開始している。併せて、父親の育児参加、児童の発達の理解を深めるため、健診事後教室「なかよし教室」や「5 歳児発達相談」に、父親の参加を促していること。
- 5 3 歳児健診から就学前、学齢期に至る支援が継続していること。（5 歳児スクリーニング事業、小学校等巡回相談等）
- 6 町立の児童発達支援事業所「ハーモニー」と関係機関との連携が図られている。健康課を始め、小学校教員が随時ハーモニーを訪問していること。
- 7 保育士、教員を始め、学校生活補助員や放課後子ども教室の職員等を含めた支援者を支える研修会・事例検討会を実施していること。
- 8 愛知県下においても、実施している市町村がなく、関係機関と顔の見える緊密さを保持しながら、実施していること。

【内容】

事業名	対象者	内 容
東郷町発達障がい早期総合支援連絡協議会	関係機関	保健・福祉・教育関係者が集まり、発達障がい児への発見・支援体制を構築し、ライフステージが移っても、支援が継続されるよう、また、発達特性のある児童と育て難さを抱える保護者へ支援が届くことを目標に、支援体制の充実を図る協議会。
お誕生日相談	1 歳児	1 歳の誕生日を祝いながら、育てにくさを感じている保護者への相談支援。
なかよし教室（健診事後教室）	言葉遅れのある児童	1 歳 6 か月児健診を始めとする健康診査で言葉遅れが確認された児に対し、月に 1 回教室を開催。年に 3 回「父親参観日」を日曜日に開催し、父親の育児参加を勧奨。
ことばの相談	就園前の児童	臨床心理士による言語理解、社会性の判断、保護者への育児指導。
5 歳児スクリーニング（健診）	年中児	町内保育園・幼稚園に通う年中児を対象に、その保護者へアンケート調査を行い、発達特性のある児童の行動観察を行い、必要な児童には発達相談（新版 K 式発達検査）を実施。
4 歳児発達相談	年少児	臨床心理士による発達検査（新版 K 式発達検査）をし、その結果に基づく育児指導。父母揃っての来所を勧奨。通園している園にも結果を伝え、適した支援方法を指導。
5 歳児発達相談	年中児	
就学前学校訪問	年長児	発達特性のある児童と保護者が入学先の小学校へ訪問、教員との懇談の場（こども課同席）。
幼保小連絡会	小学 1 年生	支援の必要な 1 年生の児童の様子を教師が伝え、幼稚園教諭、保育士と共有し、支援を確認。
小中学校等巡回相談	児童・生徒を支援する教員	発達支援スタッフが小中学校等に訪問し、発達特性のある児童・生徒の状況を共有し、支援方針を検討。
発達障がい早期総合支援研修会	児童・生徒を支援する教員等	事例検討会や講演会を年に 2 ～ 3 回実施。対象者は、保育士、幼稚園教諭、教員、学校生活補助員、放課後子ども教室の職員、児童発達支援事業所、児童クラブ職員等。

【成果】

- 1 発達特性のある児童を育てる保護者は、幼児期から育てにくさを感じており、育児書通りには進まない育児困難を抱えています。中には、児童が他児に手を出してしまうことや落ち着きがないため、子育で支援センターなどに出かけられない保護者や、父親の育児参加が少なく、母親任せの方もいます。まずは、母親の育児をねぎらい、育児指導を行い、次に父親にも児童の発達特性を伝え、両親の育児観を整えることで、保護者の孤独感を軽減しています。
- 2 発達支援スタッフの指導により、保育士、教員が児童の成長を支え、周囲の支援により、発達障がい児がスキルを身に付けることができています。
- 3 18 歳までを支援することも課が就学前学校訪問を調整し、保護者と学校との情報交換が円滑にできています。
- 4 発達特性のある児童は、ライフステージが進むにあたり、その特徴を持ち合わせながら成長します。発達障がい児を支援する保育士や教員は、日々試行錯誤を繰り返し、模索しながら支援をしています。発達障がい児を支援する職員が孤独に至らないように、巡回相談や研修会（講演会・事例検討会）を実施し、支援方針の検討、職能を向上させる取り組みは、現場支援者の下支えやモチベーションアップにつながっています。

【今後の展開】

医療機関と連携を図り、思春期を迎えた生徒への支援内容を検討し、社会性を育てる支援を実施したいと思います。また、社会人として、職場で活かせるスキルを身に付ける支援をしたいと思います。

図 1 「東郷モデル」支援体制 ～ライフステージが移っても、支援が継続されるように～

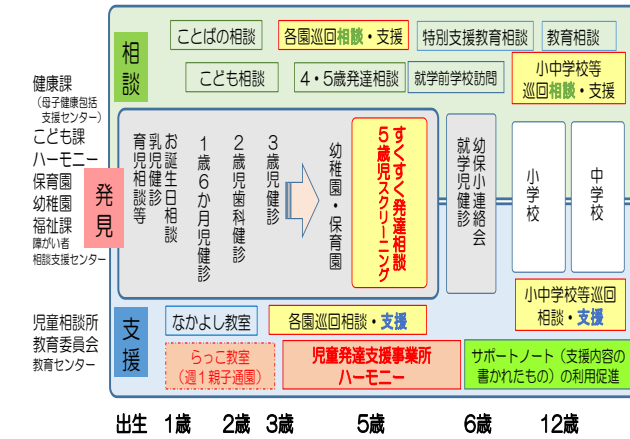


表 1 実績

事業名	実績
お誕生日相談	244人（12回）
なかよし教室（健診事後教室）	述べ351人（24回）
ことばの相談	46人（20回）
4歳・5歳児発達相談	22人（12回）
すくすく発達相談（5歳児スクリーニング）	アンケート調査（10園）318人 発達相談 33人（14回）
小中学校等巡回相談	児童・生徒14人（9回）教員61人（9回）
発達障がい早期総合支援研修会	事例検討会 54人（1回） 講演会 213人（2回）

厚生労働省子ども家庭局長賞 企業部門 優良賞

第7回 健康寿命をのばそう！アワード〈母子保健分野〉企業部門 取組概要

企業名	CI Inc.
取組タイトル	日本初の病児保育プラットフォーム事業「あずかるこちゃん」
WEB サイト URL	https://www.ci-inc.co.jp
健やか親子 2 1 (第2次)取組課題	☒ 基盤課題 A「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」 ☐ 基盤課題 B「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」 ☒ 基盤課題 C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」 ☒ 重点課題①「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」 ☒ 重点課題②「妊娠期からの児童虐待防止対策」
取組の概要(取組の背景・目的・対象者・成果・今後の展開など) □概要 共働き・核家族化の進んだ日本において、子育てをしながら働く上で最も困ることは「子どもが急病になった時の仕事の調整」であり、今なお解決できていない課題です。その一つの解決策が「病児保育」施設の充実です。病児保育とは、病院・保育園に併設した専用の施設で病氣中や病気の回復期にあるお子様を一時預かりするものです。病児保育施設は、施設数、利用人数共に増加しており、平成 28 年度は 1,515 施設、年間延べ利用人数 64 万人と拡充してきています。しかし、施設の平均利用率は 35%と低く、うまく機能していません。潜在ニーズは 10 倍以上と高いにも関わらず、利用者が少ないのは電話予約に代表される「利用しづらい仕組み」が原因です。 当社 CEO で現役の産婦人科医の園田は、産後の子育てサポートを行う中で、これまでに子どもの病氣による早退や欠勤などの理由で仕事をやめざるを得ない多くの母親に出会っており、病児保育施設と母親それぞれの課題を解決することで、働きながらも子どもを産み、育てやすい社会の実現をめざし、病児保育プラットフォーム「あずかるこちゃん」事業を開始しました。 「あずかるこちゃん」には 3 つの機能ががあります。①情報のデジタル化、②オンライン予約申込、③利用者と施設・部屋とのマッチングです。 利用者の方は、スマートフォンで LINE もしくは Web サービスから「あずかるこちゃん」にアクセスし、利用登録および情報の入力を行います。実際にこどもが病氣になり、予約申込をする際には、自宅付近の病児保育施設の空き状況を確認し、予約を行います。1 回の予約で複数施設を予約可能ですが、優先順位をつけるため、ダブルブッキングにはなりません。たとえ予約申請時に、第 1 希望の施設が満室であったとしても、30-70%と病児保育は高いキャンセル率であるため、当日朝に利用できる可能性があります。もし上位の希望施設でキャンセルが出て、下位の希望施設ですでに予約確定していた場合には、自動的に確定していた施設はキャンセルとなり希望上位の施設にシフトします。同時に、キャンセルをした施設では、キャンセル待ちだった他の方が利用できるようになります。さらにオンライン問診により、部屋割りを行います。予約時の部屋割り機能により、同一の隔離対応疾患(インフルエンザ・水ぼうそう・おたふくかぜなど)の子どもたちをエリア内のある施設に集約し、地域全体で施設利用の最適化を目指すことが可能となります。 施設単位ではなく、エリア単位でのマッチングであること、オンライン問診により、病児の状態により施設の部屋とマッチングする仕組みは革新的かつ病児保育の現場を改善すると認められ、ビジネスモデル特許を取得、2018 年度のキッズデザイン賞を受賞いたしました。また病児保育協議会の全国大会でも 2 年連続発表させていただき、関係者から多くの賛同、ご支援の声をいただいています。 現場の病児保育 20 施設と 100 人以上のお母さんの声を反映し、システム開発を進め、現在大田区、調布市の 2 施設で実証検証を行っています。来年 1 月には、全国の施設で使っていただけるように準備を進めています。 病氣のこどもを保護者が仕事を休んで不安な中ケアすることは選択の一つですが、医療者がいて、こどもが安心してケアと保育を受けられる「こども支援」を行う病児保育施設という素晴らしい社会資源が活用され、仕事をする保護者が安心して育児を行える社会になるように事業に取り組んでいます。  （左）あずかるこちゃん概念図：複数の病児と複数の病児保育施設をマッチング、さらに病児の状態（病氣/症状）に合わせて施設の部屋とマッチング （右）予約画面：1 回の予約で、優先順位をつけ何施設でも予約可能、当日のキャンセル状況によって、より希望の（一般的に自宅に近い）施設とマッチする 	

厚生労働省子ども家庭局長賞 企業部門 優良賞

第7回 健康寿命をのばそう！アワード〈母子保健分野〉企業部門 取組概要

企業名	株式会社 ベビーカレンダー
取組タイトル	“専門家監修”の情報を“日替わり”で提供 「ベビーカレンダー」アプリ
WEB サイト URL	https://baby-calendar.jp
健やか親子 21 (第2次)取組課題	☒ 基盤課題 A「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」 ☐ 基盤課題 B「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」 ☐ 基盤課題 C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」 ☐ 重点課題①「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」 ☐ 重点課題②「妊娠期からの児童虐待防止対策」

取組の概要(取組の背景・目的・対象者・成果・今後の展開など)

【取り組みの背景・目的・対象者】

近年、わが国では少子化が進んでおり、加えて核家族化、近隣住人との関係の希薄化してきています。そのような状況の中、インターネットから情報を得る人が増えてきていますが、妊娠・出産・育児に関する情報は多岐に渡り、どの情報を信じてよいのか、こんなときはどうしたらよいのかなど、かえって不安を増強させてしまうこともあり得ます。そのような現状を踏まえ、株式会社 ベビーカレンダーでは、妊娠中から 1 歳児までの育児中の方を対象に妊娠週数やお子さんの月齢に合った役に立つ情報を毎日提供するためのアプリを開発し、2017 年 5 月に提供を開始しました。

「ベビーカレンダーアプリ」のキーワードは、「専門家監修」と「日めくり」です。妊娠中の方は妊娠週数と出産予定日までの日数、育児中の方はお子さまの誕生日からの日数を表示し、日々変化する赤ちゃんのイラストがユーザー自身の赤ちゃんの成長を感じられるようになっています。そして、妊娠中からお子さまが 1 歳になるまでの間、「今」知っておきたい、「今」必要な医療の情報から出産・育児の体験談、役立つニュースやメッセージを医師・助産師・管理栄養士などの専門家監修のもと、毎日配信しています。また、助産師や管理栄養士が 3 日以内に回答する「専門家に相談」のコーナーや「医師への質問」コーナーも設けており、妊娠中や育児に関する悩みにも対応しています。そのほか、管理栄養士監修による「妊娠食レシピ」や「離乳食レシピ」を紹介しており、妊娠食のレシピは 300 件近くにのぼり、妊娠中の食生活もしっかりフォローしているところが特徴でもあります。



▲「ベビーカレンダー」アプリの画像（左：日めくり画面 中央：管理栄養士監修のレシピページ 右：医師監修記事）

【成果・今後の展開】

「ベビーカレンダー」アプリ・Web サイトは、月間で 160 万人の方にご利用いただいています。加えてユーザーの利用頻度や 1 回の起動で利用する時間が増えてきており、「トップに表示されるコメントは毎日（赤ちゃんの）成長に合わせて変わるので楽しみにしている」「日めくりで毎日違う情報を知ることができる」「（専門家に相談のコーナーは）どんな些細なことでも相談できるし、答えもすぐに返してくれるので大変助かった」「レシピがしっかりしているのでおすすめ」など、ユーザーから多くのコメントが寄せられています。

今後は、ベビーカレンダーの認知度向上とともに、より多くの方にご利用いただき、「子どもを育てることは大変だけれどもそれ以上に喜ばしい（嬉しい、楽しい、幸せな）ことである」ということを伝え、妊娠中・子育て中の方にとって、これまで以上に頼れる存在になれたらと思っています。

企業名	株式会社ヘルスケアシステムズ
取組タイトル	10代に自分の身体と向き合うきっかけを！ 検査で実現する正しい食事の知識と健康リテラシー向上への取り組み
WEB サイト URL	https://hc-sys.com/
健やか親子 21 (第2次)取組課題	☐ 基盤課題 A「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」 ☐ 基盤課題 C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」 ☐ 重点課題①「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」 ☒ 基盤課題 B「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」 ☐ 重点課題②「妊娠期からの児童虐待防止対策」

取組の概要(取組の背景・目的・対象者・成果・今後の展開など)

身体的基础が作られる10代において、ダイエットなど極端な食事制限をすることで必要な栄養素やエネルギーが不足し、月経不順になるだけでなく骨密度の減少による骨折や、将来の妊娠・出産時のリスクに影響を及ぼしていることが社会的な問題となっています。学校では、保健の授業等で女性ホルモンと健康について学習していますが、まだ若くて健康な学生に将来の健康への関心を持ってもらうことは容易でなく、自分ごととして食生活を見直すといった行動に結び付きにくいことが課題となっています。

私たちは名古屋大学発ベンチャーとして、食生活に気づきを提供する郵送検査キットを研究開発してきました。その中で、『女性ホルモンと似たのはたらきをする大豆イソフラボンの効果には個人差がある』という点に着目した尿検査キット(エクオール尿検査)を2012年から発売しています。大豆という身近な食材を通じて自分のカラダを知り、女性ホルモンと健康に関心を持ってもらうことで、これまでに20万人の女性に検査をしていただき、乳がん検診や配偶者健診の受診率向上に活用されてきました。

2015年より、高校の保健授業や地域の食育セミナーに私たちが出向き、食生活と女性ホルモンの関係や、女性ホルモンが将来の健康に大切といった学習に加えて、エクオール尿検査を導入した取り組みを行っています。自分がイソフラボンの効果が高いタイプかどうかを知ってもらうことで、自分ごととして毎日の食生活の改善を促します。これまでに全国6か所14回を実施し、約900名の10代女性の参加がありました。

東京の女子高等学校では、2015年から毎年1回、総合学習の授業において女性ホルモンと食生活の授業とエクオール尿検査を行っています。昨年は神奈川歯科大学の協力を得て骨密度測定も実施し、高校生にとって関心の高いダイエットが骨密度にも影響していることを知ってもらい、部活動で多く起こっているという疲労骨折と関連づけることで高い関心をもってもらえた実感しています。

また、愛知県の大学では管理栄養士専攻の学生による大学生親子600名を対象にした調査を実施し、授業として行う食生活アンケートと検査結果を比較することで、栄養を専門的に学ぶ学生であっても日頃の食事に偏りがあることを知ってもらい、それが将来の妊娠や出産と関係していることを学んでもらいました。10代の食事の大半は家庭に依存されることも多いため、実際に食事を作る保護者の方への知識提供も重要と考えて、親子を対象にした料理教室や食育セミナー等、親子で学べる取り組みも行っています。

弊社の検査は尿で測るので、痛みを伴わず10代でも簡単に受けることが出来ます。多くの教育機関や自治体で活用いただけるように、今後も活動の場を広げていきたいと思っています。

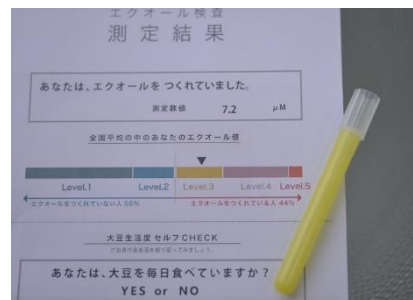
《写真①》高等学校での講義の様子



《写真②》骨密度測定の様子



《写真③》エクオール尿検査



厚生労働省子ども家庭局長賞 団体部門 優良賞

第7回 健康寿命をのばそう！アワード〈母子保健分野〉団体部門 取組概要

団体名	特定非営利活動法人ぎふ多胎ネット
取組タイトル	地域で多胎家庭を支えよう ～当事者と医療・行政・教育機関の連携による虐待防止～
WEB サイト URL	https://gifutatainet.com
健やか親子 2 1 (第2次)取組課題	☒ 基盤課題 A「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」 ☐ 基盤課題 B「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」 ☐ 基盤課題 C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」 ☒ 重点課題①「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」 ☒ 重点課題②「妊娠期からの児童虐待防止対策」
取組の概要(取組の背景・目的・対象者・成果・今後の展開など) 【取り組みの背景と対象者のニーズ】 多胎家庭は妊娠中から多胎妊娠・出産・育児に関する情報や他の多胎家庭と交流する機会も得にくく、孤立しやすい。産後も母体回復の遅れや2人以上の乳児の世話で外出困難となり孤立しやすい。また多胎であるため早産で低体重児になりやすく育てにくい児を2人以上育てることになるため育児困難にも陥りやすい。このため多胎家庭の虐待発生率は単胎家庭の3～5倍と言われており、特別な支援が必要とされている。多胎家庭へのアンケート調査でも多胎妊娠・出産・育児に関して「情報がほしい」「相談できるところや気持ちがわかってくれる人がほしい」「同じ立場の子育て仲間がほしい」「家族に理解してほしい」「地域や周囲の人に理解してもらい助けてほしい」という声が挙がった。 【事業の目的・概要・効果】 こうした多胎家庭のニーズに応え、子育てしやすい環境作りをすることで児童虐待防止を図ることを目的に、妊娠期からの多胎家庭に切れ目なく必要な支援を提供したり、多胎家庭の現状を社会に発信したりするため、保健行政や医療機関など関係機関と連携しながら以下のような事業を行なっている。こうした取り組みは29年度の厚生労働省の「調査研究報告」や『保健師ジャーナル』12月号で先進事例として全国に紹介された。 《情報提供・相談先の獲得・家族の理解に関する取り組み》 ・多胎プレパママ教室…多胎に特化した妊婦家族教室で県からの委託事業。多胎妊娠出産の基礎知識と先輩家族との交流会から成る。家族が多胎妊娠出産のリスクを正しく理解することで安全な出産に導く。助産師・保健師・子育て支援者など多胎家庭の支援に当たる関係者が一堂に会するため、参加者にとって相談窓口の獲得にもつながっている。 [地域の助産師の講義を聞く参加家族。母親だけでなく父親も子育て仲間を得る機会になっている↑] ・病院サポート…入院中の多胎妊婦を定期的に訪問する活動で医療機関からの委託事業。出産がゴールとなりがちな多胎妊婦が産後の多胎育児のイメージを獲得する機会となっている。 ・ピアサポート訪問…妊娠期から育児期を通して多胎家庭を多胎育児経験者のピアサポーターが訪問して相談に乗るもの。特に出産後の外出困難な時期に授乳や沐浴など具体的な多胎育児のスキルが聞ける機会になっている。 ・赤ちゃん訪問の同行…出産後の多胎家庭を保健師と共に訪問するもの。ピアサポート訪問と同様の効果の他、保健師が多胎育児について学ぶ機会になっている。 ・健診サポート…健診会場でピアサポーターが介助するもの。外出や移動が困難な多胎家庭にとって、未受診率を下げる効果がある他、子育ての相談にも乗ることで育児困難感の軽減を図ることができている。 《子育て仲間作りに関する取り組み》 多胎育児教室…未就園児の多胎親子を対象とする子育て教室。テーマを決めた親同士のグループトークにより、地域の子育て仲間が獲得できている。これを中学生の保育体験とコラボさせ、思春期の性教育と次世代育成も図っている。 [双子を託児する中学生→] 《社会への発信に関する取り組み》 多胎育児などのスキルをまとめた冊子や多胎家庭の現状と必要な支援をまとめた『多胎家庭白書1・2』などを刊行。保育士・保健師・行政向けの多胎に関する研修プログラムも持ち、地域の多胎支援のボトルアップとなっている。 【今後の展望】 先進事例として紹介されたことで、全国から見学者が訪れるようになったり県外からの研修会参加者も増えた。今後は全国の多胎支援者をサポートし、多胎支援のボトルアップを図りたい。また、中学生の保育体験実施の地域を拡げてマイノリティ家庭への理解を助け、誰もが子育てしやすい社会を目指していきたい。	



厚生労働省子ども家庭局長賞 団体部門 優良賞

第7回 健康寿命をのばそう！アワード〈母子保健分野〉団体部門 取組概要

団体名	特定非営利活動法人新座子育てネットワーク
取組タイトル	支え合いの子育て なかまほいく
WEB サイト URL	http://www.ccn.niiza-ksdt.com/
健やか親子 2 1 (第2次)取組課題	☐ 基盤課題 A「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」 ☐ 基盤課題 B「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」 ☒ 基盤課題 C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」 ☐ 重点課題①「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」 ☒ 重点課題②「妊娠期からの児童虐待防止対策」

①**取り組みの背景と実績** 2004 年から埼玉県新座市で地域子育て支援拠点事業に取り組む中で、乳幼児を在宅で子育てする親の困りごととして、必要とする一時保育が利用でき、一時保育の供給量不足の不満が年々高まっていた。そこで 2011 年に、親同士による新しい共同保育のプログラムを開発する案が法人内で提起され、埼玉県地域課題解決型協働事業に応募。研究者や専門家、実践者らの協力を得ながら、支え合いの子育ての仕組みづくりとしての「なかまほいく」事業を開発した。その後、エビデンス調査も行いながら、埼玉県・東京都・赤い羽根共同募金などの助成を受けて、同様の課題を抱える全国の子育て支援団体へ「なかまほいく」の普及に取り組んだ。これまでの 13 都道府県 96 団体による「なかまほいく」の実践により、乳幼児子育て家庭の支え合う力を顕在化させ、親たちのストレスを引き出し、エンパワメントするピアグループも各地で育成された。なかまほいくの実践と普及を通じて、子育て家庭の孤立化を防ぎ、児童虐待の要因となる不安や負担の軽減を図り、当事者が主体的に支え合う地域子育てを形成し、親子の健やかな成長を見守り育ち生き作りに貢献している。

②「なかまほいく」の目的

- 親：孤独・孤立からの解放。リフレッシュでゆとりづくり。児童虐待予防。親としての気づきと学び。エンパワメント。
- 子ども：少子化で得にくくなった子どもの集団体験と共育ちによる成長。他者との信頼関係づくり。母子分離の慣らし。
- 地域：親による保育課題の解決。子育て共助の地域づくり。主体的なピアサポートグループの育成。

③「なかまほいく」参加対象：主に在宅子育て中の乳幼児親子

④「なかまほいく」実施方法 子育て支援を実践し、なかまほいくについて学んだ団体等が主催者となる。

- 活動内容：1 回 2 時間程度、週 1 回×10 週=10 回連続講座。「親子一緒にの時間」「預け合いの時間」で構成。活動内容は親たちが主体的に企画し、「預け合いの時間」で半分の親が子どもを集団保育し、残り半分の親がリフレッシュの活動などを行う。
- 会場：地域の公共施設
- 実費程度の費用を主催団体が徴収して運営費に充てている。

⑤成果

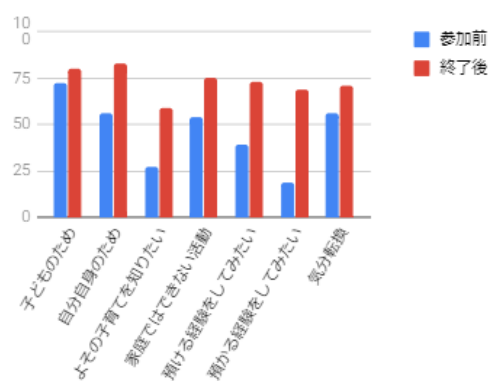
- 「なかまほいく」に参加した親子は、全国で延べ 43,858 人と、4 万人を超えている。（2018 年 3 月現在）
- 「なかまほいく」に参加した親子のすべてが、「全国に普及してほしい子育て支援の活動」と回答（2013 年調査）
- 「なかまほいく」は 13 都道府県 96 団体に普及し、支え合いの子育てを地域に広げている。
- 「なかまほいく」終了後、参加者たちによる子育てサークルやピアグループが誕生している。
- これまでマスメディアに取り上げられている。
- 最新のエビデンス調査の件（なかまほいく参加動機の参加前後の比較）を下記に掲載。

⑥今後の展開

参加者たちの支持に応え、地域子育て支援の基本的なプログラムとして、なかまほいくを、多くの自治体で実施されるよう、普及していない 34 道府県への普及に努めたい。



参加動機の変化：参加前・参加後
2018年参加者アンケート（単位：人）



厚生労働省子ども家庭局長賞 団体部門 優良賞

第7回 健康寿命をのばそう！アワード〈母子保健分野〉団体部門 取組概要

団体名	認定特定非営利活動法人マイママ・セラピー
取組タイトル	ゆりかごタクシー® ～妊産婦輸送安心システム いのちをつなぐ協働リレー
WEB サイト URL	http://mymama.jp/
健やか親子 2 1 (第2次)取組課題	☒ 基盤課題 A「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」 ☐ 基盤課題 B「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」 ☒ 基盤課題 C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」 ☐ 重点課題①「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」 ☒ 重点課題②「妊娠期からの児童虐待防止対策」
取組の概要(取組の背景・目的・対象者・成果・今後の展開など) 動機は一人の妊婦さんを救いたいことだった。お産を控えて「この子は陣痛がきたらどうやって病院へいくのだろう？」そんな小さな疑問が多くの方の力を借りて社会化したので報告する。 2012 年春。私は焦っていた。一人の妊婦が 5 月にお産を迎えることで。知り合いのタクシー事業所へ駆け込み、社長相手に「陣痛が始まった妊婦さんへの対応を仕組みとして作れないかものだろうか」と相談を持ち掛けた。できないことはないが組織として取り組めないかということで滋賀県タクシー協会の門をたたいてみた。ちょうど研修会で県内の事業所社長やドライバーさんへ「妊産婦さんを助けてください」「ただし皆さんにもメリットがあるようにしますから」と必死で提案を重ねてみた。研修会ということもあり、近畿陸運局滋賀支局の課長も同席されており、「その話ちょっと待った！！」と待ったをかけられた次の瞬間「この話、みんなで力を合わせて事業化しよう」と提案を受けた。一瞬は「え？」と思ったのである。なぜならみんなで力を合わせて事業化ということは希望する妊婦には間に合わないことがあきらかだったから。一応抵抗はした。「それでは間に合わない妊婦がいる」と。しかし、多くの人が「むしろこんな支援がまだなかったことのほうがびっくりだ」と事業化に賛成方向で動き出してしまった。あれよあれよと一気に動き出した。近畿陸運局滋賀支局・滋賀県タクシー協会・認定特定非営利活動法人マイママ・セラピーが事務局となり大津市民病院の助産師、医師を通して、滋賀県産科医会・滋賀県看護協会にも加わってもらい、滋賀県・大津市・消防本部が一同介して委員会を作り、「妊産婦の陣痛破水時の安心輸送システムの構築」というテーマで会議が始まった。会議に先立ち「産婦 100 人」と「タクシードライバー」にアンケートを実施。妊産婦さんからは「汚したらどうしよう」「慣れていない人に送ってもらうのは怖い」ドライバーさんからは「汚されたらどうしよう」「妊産婦さん、怖い」という 2 つの課題が明らかになった。この 2 つの課題を解決することができれば実現できるテーマであることを委員会で共有。汚染防止用マットを用意するとともに、看護協会助産師を講師にしてオペレータとドライバーを対象にした講習会を開催。講座資料は産科医師が作成。一定の基準をクリアすることでドライバーとオペレータに加えて各事業所にも認定を渡す仕組みとなった。救急車の適正利用も含んだ仕組みではあるが、オペレータとドライバーのやり取りを通し車中分娩になりそうときは救急車も待機してくれているという安心感なお墨付きももらい 3 回の会議を経て運行が始まることとなった。2015 年 10 月 10 日（語呂合わせ）滋賀県南部から始まり、2016 年 10 月 10 日滋賀北部運行開始、2016 年 10 月 10 日滋賀県全域での取り組みとなった。 多くの組織の力を借りて事業化された「ゆりかごタクシー®」である。現在は、各市町の母子健康手帳発行時に紹介されたり、妊婦健診においても医療機関でポスター紹介されたりして滋賀県独自の取り組みとなった。自家用車で行くことが分かっていても登録可能である。登録後は各事業所が各家庭まで下見に行き、医療機関までの確認をしてお産前後まで待機。電話がかかればお迎えに行くというシステムである。登録数は 29 年度滋賀県出生数の 25%であったが、30 年度は 40%まで上昇した。今後の目標は 50%を目指している。これだけ多くの組織に見守られて運行実現となったこの仕組みをもっと多くの方に知っていただければと願っている。（本事業は近畿陸運局バリアフリー推進会議において賞をいただいた） 下記写真は研修風景（現在は年 1 回開催。基本、滋賀県内全タクシー会社・全従業員を対象とする）	
   	

厚生労働省子ども家庭局長賞 自治体部門 優良賞

第7回 健康寿命をのばそう！アワード〈母子保健分野〉自治体部門 取組概要

自治体名	開成町（神奈川県）
取組タイトル	赤ちゃんの駅事業
WEB サイト URL	
健やか親子21 (第2次)取組課題	☐ 基盤課題 A「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」 ☐ 基盤課題 B「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」 ☒ 基盤課題 C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」 ☐ 重点課題①「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」 ☐ 重点課題②「妊娠期からの児童虐待防止対策」
取組の概要(取組の背景・目的・対象者・成果・今後の展開など) ○目的・背景○ 開成町は、面積6.55km²と神奈川県内で一番小さな町である。人口増加しており、合計特殊出生率も1.48と県内1位となっている。様々な子育て支援が求められている中で、平成29年度から乳幼児を抱える保護者の外出をサポートし、地域全体で子育てを応援するために「赤ちゃんの駅事業」を開始した。「赤ちゃんの駅」とは、授乳を行うための専用空間やベビーベッド、おむつ交換台等が設置してあり、安心して自由におむつ替えができるスペースを提供できる施設が対象となっている。また、これらの場所が衛生的であり、無料で利用してもらえることが条件となっている。事業に協力していただける事業者・施設は、町に申請し、認定を受ける。認定を受けた場合、町は赤ちゃんの駅オリジナルステッカーを配布し、事業者は利用者の目に留まりやすいところにステッカーを掲示して協力施設であることを示している。 今後は、協力施設の増加と赤ちゃんの駅の認知度を向上させていきたいと考えている。 ○方 法○ 事業に協力していただける事業所・施設は、町に申請をし認定を受ける。 申請書はHPよりダウンロード可能となっている。 ○成 果○ 平成30年10月末現在、11か所が認定を受けている。 おむつ交換・授乳可能施設 ▽開成町保健センター ▽開成町駅前子育て支援センターあじさいっこ ▽中栄信用金庫開成支店 ▽開成町福祉会館 ▽地域支援センター ひまわり おむつ交換可能施設 ▽さがみ信用金庫開成町支店 ▽開成水辺スポーツ公園 ▽横浜銀行開成支店 ▽神奈川県足柄上合同庁舎 ▽マックスバリュ開成店 ▽あしがり郷 瀬戸屋敷 ○意 義○ 「地域全体で子育てを応援したい」と考え、事業を開始した。 本事業の準備段階(平成29年度)には、母子保健推進員による地域の資源の調査、ステッカーデザインを決定する際には、幼児健診受診者に投票を行ってもらった。地区組織活動団体や住民、事業者へ協力を求め協働して推進することができた。 ○赤ちゃんの駅ステッカー○ サイズ 150mm×150mm 町オリジナルキャラクター「あじさいちゃん」 ○マスコミ掲載○ 平成30年5月9日 読売新聞社 平成30年5月12日号 タウンニュース社 平成30年5月15日 毎日新聞社	



自治体名	福岡市（福岡県）
取組タイトル	育児をするパパを応援する「パパスクール城南」の取り組み
WEB サイト URL	http://www.city.fukuoka.lg.jp/jonanku/chiikifukushi/kusei-shisetsu/chiiki-hoken-fukusika/papaschool-jonan.html
健やか親子 2 1 (第2次)取組課題	☒ 基盤課題 A「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」 ☐ 基盤課題 B「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」 ☒ 基盤課題 C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」 ☐ 重点課題①「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」 ☐ 重点課題②「妊娠期からの児童虐待防止対策」

1. 取組みの背景

核家族化や転勤等で身近に支援者がいないため、母親一人に育児負担が集中している現状がある。また、「イクメン」も増えている一方で、夫婦のコミュニケーションのずれから、父親の対応が母親の育児負担軽減になっておらず、そのことが母親の育児不安やストレスのきっかけになっている。しかし、育児技術の講座はあるが、夫婦コミュニケーションを学ぶ講座がほとんどない。また、父親が育児を積極的にしたくても、父を取り巻く環境（企業等）が仕事との両立を難しい現状があり、父親もストレスを抱えやすくなっているが、その気持ちを共有する場がほとんどない状況である。

2. 目的

①育児を通して父親が母親の妊娠・出産を理解し、物理的にも精神的にも支え、その結果、夫婦関係がより良好となり、母親の育児負担が軽減され、夫婦で協力して育児をするようになること。②父親同士の交流を図ることにより、父親が子育ての担い手としてより活躍できるようになること。③父親が子育ての担い手となることで、社会の意識も変わり、社会全体で育児をする環境となること。

3. 対象者＜父親になる予定の方、又は1歳未満の乳児の父親＞

選定の理由は、女性の愛情曲線（作成：東レ経営研究所 渥美由喜）において、夫への愛情のピークは結婚直後で、出産を機に急降下し、子どもへの愛情が急上昇する。その後徐々に回復していくグループと低迷していくグループに二分化される。この時期に、より良い夫婦関係づくりを学ぶことが、家庭の基盤づくりにとても重要であると考えたため。

4. 講座について ＜2回コース、定員：各回20名程度＞

ねらいとして、NPO ファザリングジャパン九州の講師による男性目線での「子ども・妻との関わり方」などの講話で、良好な家族・夫婦関係のコミュニケーションを学ぶ機会とし、助産師の講話から、出産前後の母の心と体の変化を知り、妻をサポートするポイントを知る機会とした。また、父親が産後の育児に取り組みやすくなるように、「沐浴」や「親子遊び」、「救急法」などの育児に関する内容を提供。そして、コミュニケーション傾向を知るためのアンケートを実施し、傾向を分析し、解説したものを受講後に送付している。

5. 成果について

＜アンケート結果より＞・「妻の話をよく聞くようになった」という方が、受講前50%から受講後は88%へ増えた。
・「育児や家事をするようになった」という方が、受講前73%から受講後は85%へ増えた。

＜まとめ＞①夫婦間コミュニケーションが良好となることで、夫婦で協力した育児となり、母親の育児負担が減り、育児不安やストレスが軽減する。②子育てを担う父親同志が交流することで、エンパワメントされ、父親の育児ストレスが減る。③子育てを担う父親が増えることで、社会全体で育児をする環境が促進される

6. 今後の展開

父親が子育ての担い手となることで、社会の意識も変わり、社会全体で育児をする環境となるために、夫婦コミュニケーションを主軸とした育児講座が広く実施されるように、NPO 法人や医療機関（産科・小児科）、大学と連携して講座等を展開していく。



産前産後の心と体の講話



夫婦コミュニケーションの講話



父親同士の交流会